

研究動向

中国における自然災害の記憶の変容

— 唐山大震災から四川大震災へ —

駱 媛

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

Changes in disaster memory following natural disasters in China

LUO Yuan

Abstract: Natural disasters have become a global concern. China frequently experiences disasters. This study focuses on disaster memory in China by discussing the related research. We clarify the history and current situation concerning efforts to retain disaster memory in China.

Keywords: disaster memory, change

1. はじめに

阪本 (2009 年) は「過去に発生した自然災害の被災の事実を忘却させずに記憶にとどめるとともに、それにより得た教訓を異なる世代や地域の人々へ継承する。」¹と述べている。奥村 (2012)²は「地域社会における記憶と歴史文化の継承をはかるという問題は、現代においては世界的な課題となっている。」と述べている。

中国においても、自然災害が頻発発生している。1949 年建国以来、最も注目される自然災害は 1976 年の唐山大震災と 2008 年の四川大震災であり、本研究はその二つの地震を対象として、災害記憶はどのように継承するかを明らかにしたい。

1976 年 7 月 28 日、Ms7.8 の大地震が北京の東方 150 km に位置する唐山市および河北省東部一帯を襲った。その地震で、唐山市は一瞬にして廃墟となった。死者 24 万 2800 人、重傷者 16 万 4851 人の人的損害をもたらし、直接的な経済損失は 1500 億円余りに達した。まさに 20 世紀最大の震災であった。

にもかかわらず、この地震に関する世界的関心は低く、余りよく知られていない³。その原因は、震災当時、中国当局は政局不安定のため、国際社会の震災支援助と震災調査を受け入れなかったことによる。そのため、被害の詳細は世界に詳しく知らされておらず、その後の研究調査も主に中国人研究者に限定され、国際的な研究を結果的には避けて来たともいえる⁴。

2008年5月12日、中国四川省アバチワン族自治州（汶川県）を震源とするマグニチュード8.0、最大震度11（日本の震度階級では6強～7に相当する）の中国史上最大級の地震が発生した。地震による死者は69,226人、行方不明者は17,923人、負傷者は374,643人、倒壊家屋が約780万戸、半壊家屋が約2400万戸、という人類史最大の地震被害の一つとなった⁵。同年8月の北京オリンピック開催を目前にして中国に視線を注いでいた国際社会を驚かせた⁶。

特に四川大震災を機に、経済発展に伴いその要を急速に変化させていた中国において、さらに多くの変化が見られるようになった⁷。その後、自然災害をめぐる研究は様々な角度から論じられるようになった。坂本(2009)は「災害の記憶は従来、昔話などの形で自然発生的に継承されてきたが、近年、行政などが意図的にそれを収集・保存しようという働きがある。」⁸と指摘した。現在唐山大震災から40年間を経て、四川大震災後10年目を迎える。日本の状況と比較し、中国の現状はどうなるか、そしていままでの災害の記憶はどうやって継承・変化するか。

以上より、本稿では中国の災害記憶に着目し、中国における災害記憶について研究を考察し、その継承に関するあゆみと現状の把握を通して、中国の災害文化研究の文献資料となることを目的とする。

2. 「災害の記憶」に関する先行研究

王曉葵(2007)の「唐山大地震における追悼と記念」⁹は、唐山大震災を対象にして、その報道、記録及び記念を紹介・分析した。公共記憶空間の構築の変化を通して、1976年から2006年の中国社会の変化を明らかにする。

阪本真由美(2009)は「地震の記憶とその語り継ぎに関する国際比較研究—トルコ・台湾・インドネシアの地域間比較から—」¹⁰では、大きな地震災害から数年以上が経過したトルコ、台湾、インドネシアという異なる地域において、被災者個人が被災経験に関する記憶の何を語るか、また、個人の記憶

を集合させた集合的記憶が形成されているか、そして形成されている場合は、どのようにその記憶は社会において意味づけられているのか現地調査に基づき把握し、結果を比較検討した。

水出幸輝（2016）は「「防災の日」をめぐる災害の記憶——1924—2014年における関東大震災周年社説を手がかりに」¹¹では、災害とメディアの長期的な関係を論じるために、1924年～2014年の90年間に掲載された関東大震災の周年社説について質的分析を施した。そして、日本の関東大震災の記憶がどのように扱われたのかを手がかりに、日本の「防災の日」の機能、及び災害の記憶と忘却について検討した¹²。最後では、関東大震災の記憶が再構築される一方で、「防災の日」に願みられることのない伊勢湾台風は集合的に忘却されている。いわば、再構築された関東大震災というナショナルな記憶は、伊勢湾台風の忘却の上に成り立っているのだと述べている¹³。

王金偉（2016）は「自然災害地における「負の遺産」の観光マネジメントに関する研究」¹⁴では、中国四川省の「北川地震遺跡区」を事例に、「負の遺産」をめぐる社会構築の過程について検討した。「負の遺産」は誰を主体としてどのように構築されるのか、またどのような過程を経て構築されるのか、さらに構築された「負の遺産」はどのように社会に広がっていくのか、これらについて分析してきた。最後では、「負の遺産観光」は主に地元住民、観光客、地方政府および観光企業など四つの主体による相互作用によって構築される。」と「各ステークホルダーが「負の遺産」を構築するのは、彼らの意識の変化、あるいは意識の調整のプロセスにおいている。」¹⁵と論じた。

以上の先行研究では、災害の記憶は次世代に伝える必要性があると指摘される。災害の記憶の変化や社会意味付けと再構築をすることがわかる。災害記憶に関する研究を整理・考察して、これらの災害の記憶がどのように再構築されたかについて検討したい。

3. 中国の自然災害記憶の変容 唐山大震災から四川大震災

国及び地方自治体などが、意図的に個人レベルの記憶を集め、それに、社会的な意味づけを与え、広く多数の人に公開しているものである。ここで集められた個人の記憶は、広く複数の個人に集合的にもたらされている記憶という意味で、集合的記憶と呼ぶことができる¹⁶。

本研究では中国で発生した災害の個人的記憶と集合的記憶の変化に焦点を

当てて、どのような過程を経て構築されるのか、さらに構築された「災害記憶」はどのように社会に広がっていくのか、唐山大地震から四川大地震10周年までの40年間についてまとめ・分析したい。

以下のように周年によって分けてまとめ・分析する。

① 1976年～1986年

王（2007年）は「唐山大地震が発生する1976年は中国政治の地震期とも言える。その年に毛沢東、周恩来、朱徳など中華人民共和国建国の指導者たちは相次いで世を去り、また四人組体制の崩壊など」で、「当時大物政治家の死による政局の変動などの国の運命に関わることと比べて、この地震はそれほど注目されていなかった、また、地震に関する報道も政治的な色彩に染められた」¹⁷と指摘した。地震の震度、被害の詳しい様子などについての紹介はなかった。この地震の死者数は「3年後の1979年11月に初めて公表された。」¹⁸とわかった。「1977年から1985年までの間、マスコミには地震に関する報道はきわめて少なかった。1985年前後、政府系の新聞には地震に関する記事が少しずつ現れた」¹⁹「地震後9年の1985年7月28日に唐山市政府は大規模な公祭大会を主催した、この大会は大多数の被災した唐山の人々にとって正式な記念活動である。」²⁰とまとめた。「1986年即ち地震10周年にあたって、「唐山市政府の機関紙『唐山労働日報』に、7月から地震に関する体験談、文学作品、記念活動の記事の掲載がはじまった。こうした報道ブームは7月28日前後頂点に達している。つまり、地震発生10周年という節目の年で政府主催のもと大きな記念行事が行われた。報道はこの記念行事を中心に展開された。」しかし、「その後、地震に関する報道は次第に消えていった。」²¹とまとめる。

1986年唐山抗震記念碑広場が記念碑、記念館と同時に完成した。王（2007）は「行政を担う国家権力が記念碑、記念館などの可視化された「物」を通して、事件への記憶が固定され、一方、再構築される。」「抗震広場で行われた日常的・世俗的な活動は絶えず地震記憶を洗い流している。」²²と指摘され

② 1987年～1996年

1991年では1985年から指定した「唐山抗震記念日」を「唐山市減災日」と改めた。強い政治的色彩から単純な人道意義へ変わる。中国社会文化の変動を窺うことができる²³。

王（2007）は1996年新聞に掲載した体験談の内容の分析を通して、「文章

の書き方と内容など共通の規則を守っているように見える。つまり、震災の被害、救出されことを特定の政党、社会制度と結びつけ、震災をめぐって語ることによって「共産党」「解放軍」「社会主義」の偉大さを証明することである。」²⁴をわかった。また「体験談の語り方の形成は、やはり政府系のマスコミの影響が決定的な役割を果たした。」「このような一部選択された体験談を通して、個人の記憶は公共記憶の一部となり、逆にこれらの公共記憶はのちの個人記憶の形成に一つの規範を与えた。」²⁵と述べている。

③ 1997年～2006年

2001年7月、即ち地震25周年の際、唐山市政府は座談会を開催した。「この座談会においては、哀悼及び記念の色彩は大幅に弱められると同時に、「抗震精神」に新たな時代要素が注入された。」²⁶

唐山大震災30周年（2006年）の時、「体験談」は再び登場し、その中の一つの変化は、インターネット上にも大量の体験談が登場したことである²⁷。

④ 2007年～2016年

四川大震災は唐山大震災と大きく変わった。地震が発生した当日には、テレビの生中継やインターネットなどで報道された。その被害状況・救援活動などの内容は毎日更新して紹介された。「中国の主要な報道機関は被害の状況を全方位で世界に伝えていた。」「中国災害報道について、一つ大きな進歩といえる。」²⁸

4. 結語

以上、中国で発生した唐山大震災から四川大震災までの災害記憶について考察・検討した。

- ① 中国では災害記憶は行政などが意図的にそれを収集・保存しようという働きがある。災害に関する記事・報道・行事なども「共産党」と「社会主義」の偉大さを証明するためである。強い政治的色彩をもっており個人的記憶を弱める。
- ② 地震に対する個人的記憶と集会的記憶の間では相互作用している。繰り返される間に災害の記憶は再構築されつつある。
- ③ 以前と異なる形式の体験談はインターネットで増えている。
- ④ しかし、インターネット上の報道・体験はまだ権力機関の監督の下で進められている。

- ⑤ 改革開放後の中国では、経済が発展しているとともに、災害への認識は変わってきている。「減災日」の改称から、強い政治的色彩から単純な人道意義に変動していることがわかる。
- ⑥ 災害の記憶が時代とともに変容していると考ええる。

これらの災害に関する個人的記憶と集合的記憶の分析を通して、われわれはより正確的に地震など自然災害及び中国社会・文化を理解することができると思う。

注

¹ 阪本真由美・木村周平・松多信尚・松岡格・矢守克也、「地震の記憶とその語り継ぎに関する国際比較研究—トルコ・台湾・インドネシアの地域間比較から—」、京都大学防災研究所年報 第52号B、2009年6月

² 奥村弘、「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」、2012年、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書

³ 洪景鵬、宮田隆夫、「20世紀最大の地震災害—唐山地震30周年レビュー」、神戸大学都市安全研究センター研究報告 第11号 323頁、2007年3月

⁴ 洪景鵬、宮田隆夫、「20世紀最大の地震災害—唐山地震30周年レビュー」、神戸大学都市安全研究センター研究報告 第11号 323頁、2007年3月

⁵ 巖成男、「中国における国家主導のコーディネーションと2008年四川大地震からの復興」、商学論集 第81巻第2号 34頁、2012年12月

⁶ 大谷順子、「中国の災害復興政策：四川大地震から三年目の検証」、大阪大学大学院人間科学研究科紀要 第38号 41頁、2012年3月30日

⁷ 大谷順子、「中国の災害復興政策：四川大地震から三年目の検証」、大阪大学大学院人間科学研究科紀要 第38号 41頁、2012年3月30日

⁸ 阪本真由美・木村周平・松多信尚・松岡格・矢守克也、「地震の記憶とその語り継ぎに関する国際比較研究—トルコ・台湾・インドネシアの地域間比較から—」、京都大学防災研究所年報 第52号B、2009年6月

⁹ 王曉葵、「唐山大地震における追悼と記念」、愛知県立大学外国語学部紀要 第39号（地域研究・国際学編）125～147頁、2007年

¹⁰ 阪本真由美・木村周平・松多信尚・松岡格・矢守克也、「地震の記憶とその語り継ぎに関する国際比較研究—トルコ・台湾・インドネシアの地域間比較から—」、京都大学防災研究所年報 第52号B、2009年6月

¹¹ 水出幸輝、「防災の日」をめぐる災害の記憶——1924—2014年における関東大震災周年社説を手がかりに」、マス・コミュニケーション研究、No.88 157～175頁、2016年

- ¹² 水出幸輝、「防災の日」をめぐる災害の記憶——1924—2014年における関東大震災周年社説を手がかりに」、マス・コミュニケーション研究、No.88 159頁、2016年
- ¹³ 水出幸輝、「防災の日」をめぐる災害の記憶——1924—2014年における関東大震災周年社説を手がかりに」、マス・コミュニケーション研究、No.88 171頁、2016年
- ¹⁴ 王金偉、「自然災害地における「負の遺産」の観光マネジメントに関する研究—中国四川省「北川地震遺跡区」を事例として—」、CATS 叢書第9号 8章87～96頁、北海道大学観光学高等研究センター、2016年
- ¹⁵ 王金偉、「自然災害地における「負の遺産」の観光マネジメントに関する研究—中国四川省「北川地震遺跡区」を事例として—」、CATS 叢書第9号 8章94頁、北海道大学観光学高等研究センター、2016年
- ¹⁶ 石田雄、『記憶と忘却の政治学、同化政策、戦争責任、集合的記憶』、明石書店、2000年
- ¹⁷ 王曉葵、「唐山大地震における追悼と記念」、愛知県立大学外国語学部紀要第39号（地域研究・国際学編）127頁、2007年
- ¹⁸ 王曉葵、「唐山大地震における追悼と記念」、愛知県立大学外国語学部紀要第39号（地域研究・国際学編）128頁、2007年
- ¹⁹ 王曉葵、「唐山大地震における追悼と記念」、愛知県立大学外国語学部紀要第39号（地域研究・国際学編）128頁、2007年
- ²⁰ 王曉葵、「唐山大地震における追悼と記念」、愛知県立大学外国語学部紀要第39号（地域研究・国際学編）139頁、2007年
- ²¹ 王曉葵、「唐山大地震における追悼と記念」、愛知県立大学外国語学部紀要第39号（地域研究・国際学編）128頁、2007年
- ²² 王曉葵、「唐山大地震における追悼と記念」、愛知県立大学外国語学部紀要第39号（地域研究・国際学編）138頁、2007年
- ²³ 王曉葵、「唐山大地震における追悼と記念」、愛知県立大学外国語学部紀要第39号（地域研究・国際学編）141頁、2007年
- ²⁴ 王曉葵、「唐山大地震における追悼と記念」、愛知県立大学外国語学部紀要第39号（地域研究・国際学編）130頁、2007年
- ²⁵ 王曉葵、「唐山大地震における追悼と記念」、愛知県立大学外国語学部紀要第39号（地域研究・国際学編）130頁、2007年
- ²⁶ 王曉葵、「唐山大地震における追悼と記念」、愛知県立大学外国語学部紀要第39号（地域研究・国際学編）141頁、2007年
- ²⁷ 王曉葵、「唐山大地震における追悼と記念」、愛知県立大学外国語学部紀要第39号（地域研究・国際学編）128頁、2007年
- ²⁸ 王曉葵、「川地震の記録と記憶伝承に関する基礎的研究」、『共生の文化研究』171頁、愛知県立大学多文化共生研究所、2009年3月

参考・引用文献

石田雄、『記憶と忘却の政治学、同化政策、戦争責任、集合的記憶』、明石書店、2000年

奥村弘、『大震災と歴史資料保存—阪神・淡路大震災から東日本大震災へ—』、吉川弘文館、2012年